

東アジア文化の構築

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程

日本学術振興会特別研究員

倉田 徹

はじめに

東アジアの相互理解の促進や、「東アジア共同体」の構築にあたり、多くの者が「東アジア人意識」ないし「東アジア・アイデンティティ」を築く必要性を主張している。そのような議論は、翻ってみれば、現実において東アジア・アイデンティティが欠如していることに対する問題意識の現れである。

例えば日本政府は 2004 年 5 月 11 日、インドネシア・ジョグジャカルタで開催された ASEAN+3 高級事務レベル会議での議論に基づき、「東アジア・コミュニティ」に関する「論点ペーパー1」を公表し、その中で、機能的アプローチ（機能的協力の促進）・制度的アプローチ（制度的取決めの導入）とならび、「コミュニティ意識」の醸成をコミュニティ形成へのアプローチとして提起しているが、「コミュニティ意識」の醸成は、東アジアにおけるコミュニティ形成において、最も困難で独創的な部分かも知れないと指摘し、この点につき我々は明確な答えを有していないと述べ、結論を出せずにいる¹。

コミュニティ意識、ないしは東アジア・アイデンティティの構築には、どのような条件が必要なのであろうか。本論文では、東アジア共通のアイデンティティが弱い理由について、様々な論者の分析・主張を整理し、その上でこの問題点を克服し、「東アジア・アイデンティティ」を構築するために、筆者が有効と考える方法である「東アジア文化」の構築について提案したい。

1. 東アジア・アイデンティティの脆弱性の原因

(1) 歴史的な域内相互関係の弱さ

地域協力の先進的事例とされるヨーロッパは、地域アイデンティティの創出に成功した例としても挙げられる。例えば柿澤弘治は、「私が一九六四年から一九七一年まで生活していたヨーロッパでは『我々ヨーロッパ人 (We, Europeans)』という意識が育ちつつあることを実感した。私たちも、今後『我々東アジア人』との自覚を高め、その感覚を東アジア諸国民と共有していくことの必要性を痛感するものである」と述べている²。

¹ 日本国外務省「論点ペーパー1：「東アジア・コミュニティ」について」、2004年。（東海大学平和戦略国際研究所編『東アジアに「共同体」はできるか』、社会評論社、2006年、224-230ページに転載。）

² 柿澤弘治「「アジアは一つ」、いまこそ」東海大学平和戦略国際研究所編、前掲書、19ページ。

木畑洋一は、ヨーロッパ・アイデンティティの誕生には、ヨーロッパの歴史が大きく関係していると主張する。即ち、中世ヨーロッパでは、カトリック教会やラテン語などを媒介としたエリート層の間の共通の文化的帰属意識が存在する一方、国と国との境界を問題としない民衆の移動も、職人の遍歴などの形で見られた。また、ヨーロッパというまとまりが、それに対比される他者（ヴァイキングやマジヤール人、イスラーム教徒やトルコ人など）との関係の中で定義されつづけてきた。木畑は、ヨーロッパの様々な国家の間に一種の統一性を持った「ヨーロッパ文明」が存在するとうたうギゾーの『ヨーロッパ文明史』や、ヨーロッパ諸国が一つの政治システムを形成していたこと、争いの回避のルールを共有していたこと、支配階級と専門家のヨーロッパ大のネットワークが存在したこと、共通の文化遺産を保有していたことなどから、1914年以前のヨーロッパが明らかにトランスナショナルな社会であったと指摘するワットの主張などを引き、また逆にヨーロッパの国民国家が、とくに民衆のレベルでは多様な民族的・地域的アイデンティティを内部に持っていることにも触れ、最近見られるヨーロッパ・アイデンティティ・国民国家アイデンティティ・地域アイデンティティの三空間併存のアイデンティティの出現は、ヨーロッパ統合の動きという大きな変動のなかで生じた現象であるとしても、歴史に太い根が存在すると指摘する³。

それでは、東アジアには「東アジア・アイデンティティ」を支持する歴史的な根拠が存在するであろうか。歴史学における「東アジア世界論」は、中華帝国を中心とした冊封体制を意味する。冊封体制下では、中国王朝に外交使節を派遣してきた周辺君長に対し、中国王朝はこれに爵位・官職号などを与えて君臣関係を結び、周辺諸国はこの冊封関係によってもたらされる漢帝国の政治制度や漢字・漢文等の中国文化・文明によって、自己の国家や社会を形成・成長させてきた⁴。このような関係は、現在の東アジア諸国を結んできた歴史的紐帯である。

しかし、中国文明を中心とした東アジア世界の繋がりには限界がある。まず、東アジア諸国のうち、中国文明圏に入ったのは、日本・韓国・ベトナムまでであり、ベトナム以外の東南アジア諸国は中国文明圏の外にあった。歴史学における「東アジア」は、通常東アジア共同体論が想定するところの東南アジアと北東アジアを合わせた範囲ではなく、北東アジアのみを指す場合が多いのである。

もともと、東アジア共同体の範囲を ASEAN+3 であると規定すれば、人口・面積・経済規模の面において、中国文明圏はその主要部分を構成することとなり、中国文明の共有が「東アジア・アイデンティティ」の基礎を構成すると発想することも可能とも見える。しかし、冊封関係による中華帝国と周辺の緩い繋がりには、北東アジアないし狭義の東アジア

³ 木畑洋一「ヨーロッパ統合とアイデンティティの重層性：EC」蓮實重彦・山内昌之編『いま、なぜ民族か』、東京大学出版会、1994年、204-216ページ。

⁴ 川勝守「東アジア世界とは何か」『地域文化研究Ⅱ－東アジア歴史像の構成－』、放送大学教育振興会、2002年、40ページ。

地域の中にすら、非常に大きな多様性を残したままであった。

例えば中国文明圏の価値観の根幹をなすと措定されるのは儒教であるが、古田博司は、日本が儒教の「礼」「礼制」を導入しなかったことなどを指摘し、日本は東アジアの基準からすれば、儒教国家とは見なしがたいと述べている⁵。サミュエル・ハンチントンは『文明の衝突』において、「一部の学者は日本の文化と中国の文化を極東文明という見出しでひとくくりしている。だが、ほとんどの学者はそうせずに、日本を固有の文明として認識し、中国文明から派生して西暦 100 年ないし 400 年の時期にあらわれたと見ている⁶」と指摘し、日本は中国・朝鮮半島とも異なる一国のみの「日本文明」を形成しているとした。日本と中国・朝鮮半島との差がそれ程までに大きいものであるとするならば、東南アジアとの差は言うまでもない。東アジアには「ヨーロッパ文明」のような、統合的な地域規模の文明は歴史的に形成されなかったのである。

歴史的な東アジアの域内相互関係の弱さは、東アジア・アイデンティティの脆弱さの根本的な要因であると言えよう。

(2) ナショナリズム

また、東アジア各国の強いナショナリズムが、東アジアの地域協力に対してマイナスに働いていることも指摘できる。特に、東アジア共同体の二大国である日本と中国の最近の対立は、極めて憂慮すべき事態である。

2005 年 3 月、中国国内で日本の国連安保理常任理事国入りに反対するネット署名が展開され、数千万人が署名活動に応じた。4 月には中国沿海部の大都市を中心に、大規模な反日デモが発生し、4 月 3 日の深圳、9 日の北京・広州、16 日の上海のデモは、数千人から数万人の規模に達したとされ、各地の日本大使館・領事館、日系スーパー・デパート、日本製品の販売店、日本料理店等には、石・ペットボトル・ペンキなどの投擲や、広告・看板などの破壊といった暴力行為による、大きな被害が出た。この様子は日本でも大きく報じられ、多くの日本国民が衝撃を受けると同時に、翻って日本国内の対中感情も大幅に悪化した。小泉首相の靖国神社参拝問題をめぐって、日中間の首脳会談は中断したままであり、日中の政治的関係は冷え切っている。東アジア共同体についても、日中の主導権争いが、協力を妨害しているとしばしば言われている。また、歴史問題をめぐっては、日本と韓国との関係にも緊張が招来されており、竹島問題も相俟って、日韓関係も不安定化している。

これらの「歴史問題」は主として、近代における戦争の歴史に起因した問題である。歴史問題は東アジアの地域協力にとっての大きな障害として、従来より認識されてきた。ローズマリー・フットは、歴史問題のために、「太平洋アジアにおける日本の役割は、この地域の国々にとって、問題を残すものとなっており、日本を、将来の政策的変化の首唱者ないしは地域機構における指導的なアクターとして位置づける議論をさらに複雑にしてい

⁵ 古田博司『東アジア・イデオロギーを超えて』、新書館、2003 年、55 ページ。

⁶ サミュエル・ハンチントン著 鈴木主税訳『文明の衝突』、集英社、1998 年、59 ページ。

る」と指摘する⁷。

一方、古田博司は、東アジア各国の強く排他的なナショナリズムの根源を、近代の日本の侵略以前からのものとして捉えている。古代からの中華帝国での夷狄を蔑視する「中華思想」は、周辺各国でも類似の現象を招いた。ベトナムでは15世紀に自己を「北国」である中国と対等の「南国」と見立て、カンボジアやラオスのような周辺の小国を蔑視する「南国」意識が生まれた。朝鮮半島では、明の滅亡以後、自らが儒教の礼儀作法の正統を受け継ぐ「小中華」であるとの思想が生まれ、琉球や日本を蔑視した。他方日本では、近世徳川政権期に、泰平の世を謳歌する日本は「皇国」であるとして、戦乱を繰り返す中国に対する侮蔑感が広まったという。古田はこのような東アジアを「中華思想共有圏」であると論じ、相互の文化交流が困難を極めることの要因をここに見いだしている。ヨーロッパの場合、エジプト、シュメール、エーゲ文明、ラテン文明と、ヨーロッパへと行き着くまでの各中心文明がみな次々に滅亡していった。その過程で自己を文明の中心とする中華思想はその都度自滅した。一方の東アジアでは、中国が近世に到るまで中華思想を独占し、周辺国の中国に対する反発が原因で、中世末から近世にかけて中華思想の分有が周辺国に起こったのである⁸。

このように、前近代の歴史と、近現代の歴史に裏打ちされた、各国の強いナショナリズムは、東アジアの連帯に対して負の作用をしているのである。

2. 東アジア・アイデンティティをいかに構築するか

(1) 歴史的遺産とナショナリズムに対する現代流行文化の力

以上に見たように、東アジアに歴史的に地域全体をおおう共通の文明が存在しなかったこと、そして東アジア各国、特に日中韓の各国が強いナショナリズムを持ち、相互対立が発生していることが、東アジアの相互理解に問題が生じ、東アジア・アイデンティティが弱いものに留まっていることの大きな原因と考えられる。

しかし、このような問題を克服する可能性のある要素として、最近注目されるのが、例えば日本の漫画・ゲームや、「韓流」と言われる韓国映画・ドラマの大流行など、現代流行文化の東アジア全体を巻き込むブームである。

現代流行文化は、二重の意味で東アジア・アイデンティティの弱さの原因を克服できる可能性を秘めている。まず第一に、中国が中心文明を独占し、それに対する正・負の反応として展開されてきた歴史的な東アジアの文化交流と異なり、現代流行文化は、日本の漫画・ゲーム、韓国のドラマのほか、香港映画、台湾のドラマなども存在し、多様な発信源を持つ。したがって、歴史上における中国中心のハブ・スポーク型の関係の展開よりも、

⁷ ローザマリー・フット「太平洋アジアにおける地域対話の発展」L. フォーセット・A. ハレル編、菅英輝・栗栖薫子監訳『地域主義と国際秩序』、九州大学出版会、1999年、257ページ。

⁸ 古田博司「東アジア中華思想共有圏の形成」古田博司、前掲書、8-62ページ。

より密度の濃い東アジア大のネットワークを形成する可能性がある。

白石隆は、東アジアにおいてインフォーマルなネットワークの拡大と深化によって「地域化」が発生していることを、東アジアの雁行型経済発展から説明している。即ち、まず日本で発生した高度成長と工業化は、次に東アジア NIES、さらに ASEAN の順で、直接投資・技術移転による工業化を発生させた。これに従い、まず 1950 年代の日本で、次いで 1970-80 年代に NIES で、その後東南アジアで、さらに中国の大都市でと、中産階級の形成が見られた。その結果、1980 年代半ば以降、東アジアの大都市では、生活スタイル、消費のパターン、育児、ファッション、教育など、さまざまな分野において、一世代前と比べれば互いにはるかに多くのものを共有する人たちが「マス」として生み出された。彼らの間に東アジア「共通文化圏」とも言うべき市場が形成されていると白石は指摘する⁹。

第二に、外国文化の流行は、その国に対する感情を好転させ、外国に対する排他的な感情や、優越感・脅威の感覚とは逆のベクトルを向く感情を醸成することが可能であり、ナショナリズムの悪影響を緩和することが可能である。

例えば「韓流」の影響は、すでに日本国内の対韓国世論に明確に示されている。「時事世論調査」によれば、1960 年 6 月以来続いている日本人の「好きな国・嫌いな国」調査において、韓国を「好きな国」として挙げる者が「嫌いな国」に挙げる者を上回ったのは、2002 年のサッカー・ワールドカップ直後と 2005 年の 1 月・3 月の 3 回である。室谷克実はこれは「韓流」の累積的効果であろうと述べている¹⁰。2005 年春以降、日韓関係は歴史問題・竹島問題をめぐって大いに緊張した。同年 10 月に日本政府が行った「外交に関する世論調査」では、現在の日本と韓国との関係は全体として良好だと思いか聞いたところ、「良好だと思ふ」とする者の割合は 39.6%であったのに対し、「良好だと思わない」とする者の割合は 50.9%と過半数に達した。しかし、韓国に親しみを感じるか聞いたところ、「親しみを感じる」とする者の割合が 51.1%に上り、「親しみを感じない」とする者の割合は 44.3%に留まった¹¹。日韓の政治的関係が急速に悪化する中でも、過半数の者が韓国に親しみを感じると回答した背景には、明らかに日本国内での「韓流」ブームが影響していると言えよう。

東アジア諸国の多くで民主化が進展し、西欧型のデモクラシーの導入を拒んでいる中国でも、日中関係に「大衆」や「世論」が大きな影響力を及ぼすアクターとして登場してきたと指摘されるなど¹²、大衆の感情・世論が東アジア内部の国家間関係に与える影響力が拡大する中で、流行文化は東アジアの協力を妨げるナショナリズムに対し、それを抑制する有効な働きをする可能性がある。例えば 2005 年の中国の「反日デモ」発生の際、中国大陸

⁹ 白石隆「東アジア地域形成と「共通文化圏」」添谷芳秀・田所昌幸編『日本の東アジア構想』、慶應義塾大学出版会、2004 年、11-30 ページ。

¹⁰ 室谷克実「日本人の「好きな国・嫌いな国」の研究」『時事評論』、2005 年 9 月号、2-7 ページ。

¹¹ 内閣府「外交に関する世論調査」

(<http://www8.cao.go.jp/survey/h17/h17-gaikou/2-1.html>)

¹² 毛里和子『日中関係：戦後から新時代へ』、岩波新書、2006 年、205 ページ。

各地のデモで「日本製品ボイコット」が高らかに叫ばれたのに対し、香港のデモではこのスローガンがほとんど見られなかった背景には、香港が日本文化の影響を非常に強く受けているという側面が影響したと見られる¹³。

(2) 流行文化交流の限界

しかし、現状の東アジア内部での流行文化の交流が続いたとしても、必ずしもそれが順調に東アジア・アイデンティティの醸成に繋がると確信できるものではない。

第一には、東アジア域内の各国が現代文化の発信力を高めているとは言え、未だにそれぞれの文化が基本的には「各国文化」として認識されているという点である。

東アジア共同体評議会は、「TV や映画、音楽の商業ベースでの流行が国境を越えて広がり、旧来の国や社会の『イメージ』を変えてしまうような事態を一部では引き起こしている、東アジアの『文化交流』による『大衆』の間での『親近感』の醸成に役立つような状況も現れてきた。今後、こうした傾向は大きく広がる可能性を潜めており、国家間政府間の困難な問題や思惑は別として『東アジア文化』を形成してゆくことも考えられる。『韓流』は流行現象としての持続に限りがあるのは当然に違いないが、『中流』『日流』『タイ流』などが続き、やがて東アジア多国間での『共有文化』として相互的な文化協力による『東アジア文化』の創造に向かうことが現実問題として大いに可能である」と、期待を寄せている¹⁴。しかし現状を見ると、例えば、「韓流」はあくまで韓国文化であり、日本や中国、東南アジア諸国の者にとっては、外国文化として受容されるに留まっており、東アジアの者にとっての「我々の文化」、いわば「東亜流」になるには到っていない。

第二に、東アジア各国の相互間に、流行文化の流入に対する警戒感が惹き起され、それがナショナリズムを刺激し、反作用を生んでいる例が見られることも憂慮すべき問題である。

和田純は、商業ベースで浸透するポピュラー・カルチャーから自然には流通しにくいハイ・カルチャーまで、東アジア各国が近年まで異なる文化の流入や交流に対してお互いに警戒的であったと指摘している。文化は民族・歴史・宗教といった複雑な要素を背負い、その交流は価値を伝達し、お互いの文化の変容をもたらすがゆえに、国際文化交流は自国のガバナンスに大きく関わりかねない問題だった。政治体制の未成熟や冷戦の名残もこれに影響した¹⁵。

東アジアで民主化や文化の自由化が進んだ現在においては、仮に政府が文化交流を抑制しなくとも、民衆のナショナリズムがこれに反発するケースがある。例えば、日本では「韓流」ブームに対し、『嫌韓流』と題する漫画がベストセラーとなった。中国では、韓国のテ

¹³ 倉田徹「「反日デモ」に見る「一国二制度」－香港のデモでは、なぜ暴力事件が起きないか」『外交フォーラム』、2005年7月号、76-81ページ。

¹⁴ 東アジア共同体評議会『東アジア共同体構想の現状、背景と日本の国家戦略』、東アジア共同体評議会、2005年、35ページ。

¹⁵ 和田純「東アジアにおける日本の国際文化交流と文化外交」添谷芳秀・田所昌幸編、前

テレビドラマ『チャングムの誓い』が大人気を呼び、中国全土で1億6千万人が視聴したと言われたが、これに対し、中国の俳優・張国立は、「『チャングムの誓い』には事実誤認がある、針・灸は明らかに中国人が発明したものなのに、劇中ではなぜ朝鮮人が発明したものになっているのか。マスコミが韓国ブームをあげめ奉るのは、売国奴である」と、嫌悪感を顕わにした発言をしている。また、香港の俳優ジャッキー・チェンは、「ハリウッドと韓流に対抗するためマスコミは我々中国のスターを支持すべきだ、マスコミは韓国の二流スターのためにあまりに紙幅を割きすぎている」とも述べている¹⁶。彼らは「韓流」を他者からの攻撃と見ているのである。

文化などの国家の魅力は、「ソフト・パワー」として、国家の戦略に有効利用できると注目されつつある。麻生太郎外相は2006年4月28日、「文化外交の新発想」と題した講演を行い、外交において日本のブランド・イメージを向上させる必要性を強調し、新進気鋭の外国人の漫画家を対象として、マンガのノーベル賞のようなものを作る構想や、日本の映像・アニメ作家の若者を発掘して「アニメ文化大使」とし、彼らの作品を、日本の大使館・総領事館のネットワークを総動員して世界に紹介する構想、現地の学生を一定期間大使館・総領事館でインターンとして受け入れ、文化交流の仕事を経験させる構想などを発表した¹⁷。しかし、これに対する香港の親中国系新聞の論調は非常に厳しい。「日本のアニメ産業はもとより世界の文化に対して巨大な影響を与えることしか出来ず、これによって世界政治に与える影響力はごくわずかである¹⁸」、「麻生太郎は狂った発言を行い、中国に対して『アニメ外交』を展開し、中国人の日本に対する見方を変えようとしている。これは出来もしない馬鹿げたことではないだろうか！中国の豊かで深い中華文化を前に、小日本の漫画は取るに足らぬ小細工に過ぎず、遅かれ早かれ吸収され、改造され、とけ込んでしまうのである！¹⁹」、「日本のアニメはある程度『文化侵略』の役割を果たしている。日本アニメの制作の際、制作者が意図的に乃至無意識のうちに、日本の価値観や政治的・文化的発想をその中に盛り込んでいることは、全く疑いの余地がない。したがって、他国の消費者が日本のアニメを消費する際、『日本の意志』の影響を不可避免的に受けるのである²⁰」というような論調には、日本アニメ批判というだけではなく、中国側に鷹派として警戒されている麻生外相に対する批判という要素が含まれているとは言え、日本の「文化侵略」に対する警戒心と、日本文化の優越性を認めようとしない屈折したナショナリズムが露骨に現れている。これは文化が「ソフト・パワー」として再認識されたことの裏返しとも言える現象であろう。

掲書、60 ページ。

¹⁶ 『香港經濟日報』、2005年10月6日。

¹⁷ 外務省ホームページ

(http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/18/easo_0428.html)

¹⁸ 『大公報』、2006年5月2日。

¹⁹ 『大公報』、2006年5月24日。

²⁰ 『大公報』、2006年5月31日。

このように、異文化交流は「異文化」である限り、それを積み重ねるだけでは、文化を伝える側と受容する側に共通のアイデンティティは形成されにくいのである。現代の流行文化にとっても、東アジア各国の歴史的疎遠性と、強烈なナショナリズムを乗り越えることは、そう容易ではない。

3. 「東アジア文化」の構築

(1) 各国文化を超える東アジア文化

これまで見てきたように、東アジアの現代流行文化の交流は、東アジアの相互理解進展に一定の効果をすでに示しており、「東アジア・アイデンティティ」の強化に重要な役割を果たす可能性が見られるが、日本人にとっての韓国文化、タイ人にとっての中国文化は現状あくまで異文化である。歴史的な域内各国の関係の弱さや、強烈なナショナリズムを乗り越えるためには、東アジア人が皆「われわれのもの」との意識のもとに共有できる「東アジア文化」を構築せねばならない。それでは「東アジア文化」は、どのようにして創造されるであろうか。

ここでヒントとなるのは、先述のヨーロッパにおける、ヨーロッパ・アイデンティティ・国民国家アイデンティティ・地域アイデンティティの三空間併存のアイデンティティの出現である。ヨーロッパでは、国民国家体制の圧倒的優位から、三空間併存への移行が生じている。東アジアでも、強固なナショナリズムを超克する方法は、東アジアという国民国家の上位への動きと、国家内部の小地域という国民国家の下位への動きによって、進めることが可能なのではないか。

国民国家の上位への動きとしては、国境を越えた文化の共同制作が挙げられる。経済のグローバル化により、日本企業の製品が中国で生産されることが当たり前となり、今や我々の身の回りの製品は、何が日本製品で、何が中国製品なのか、分からないような状況になりつつある。同様のことを、文化の分野において進めれば、ある特定の国家が独占排他的な「所有権」を主張せず、制作に参加した地域全体の者が「われわれ」のものとして受け入れることができる文化、即ち「東アジア文化」が誕生するはずである。

例えばアニメーションはよい題材であろう。架空の人物が活躍し、かつ吹き替えという方法によってどの国の者にも平等に理解が可能であるため、アニメは様々な国の者が共有することが容易である。また、多数の者が役割分担して制作するという特徴のため、各国の者による分業を進めやすい。日野みどりは、香港のある学生が、国際交流の場において香港を代表して出し物を求められた際、何が香港文化であるか思い当たらず、「『ドラえもん』とか『銀河鉄道スリーナイン』ならよく知ってるけど、みんな日本製だし」と悩んだというエピソードを紹介している²¹。つまり、一考した後で「日本製」であることに気づいたとはいえ、この学生は無意識のうちには、「ドラえもん」や「銀河鉄道スリーナイン」を、

²¹ 日野みどり「香港人であることと中国人であること」瀬川昌久編『香港社会の人類学—総括と展望』、風響社、1997年、211ページ。

「われわれ」のものとして、違和感なく消化していたのである。確かに「ドラえもん」は日本製であろうけれども、例えば中国人が原作を書いた作品を、日本人がアニメ映像化し、韓国人がこれに音楽を提供するというような形をとれば、もはやこの作品は「東アジア製」としか言いようがない。

実はこのような文化の共同製作・融合は、すでにその萌芽がみられる。例えば、台湾では日本の漫画を原作とし、台湾人の俳優が日本人の名前を持つ役を、中国語で演じるというドラマが人気を集めたという。また、ハリウッドでは、中国人の女優が、日本の芸者の役を演じるという映画も作られている。学術においては、歴史問題に関する三国の論争が絶えない中で、「未来を切りひらく歴史」のような、共同での歴史研究の試みがなされ、その成果は三国同時出版によってすでに共有されている。2004年開催のサッカー・アジアカップは、アジアという地域の祭典ながら、国家代表チームの対戦という形式をとったために、中国において反日ナショナリズムの暴走という事態を招いたが、他方2002年のワールドカップの日韓共催は、一種の文化の共同制作の効果をもたらし、特に快進撃した韓国チームに対する日本からの大きな声援は、東アジアの仲間という意識を象徴した出来事であった。青木保は、「日本のアニメ・漫画が各国で歓迎され、『韓流』が各国でファンを得る。中国の映画監督チャン・イーモウの作品に高倉健が参加し、中国の女優チャン・ツイイーが鈴木清順監督の映画に出る。これほどまで相互乗り入れ的文化交流が見られるのは、地域の歴史上、初めてではないか。」と指摘している²²。東アジアの文化共同制作は、歴史的なハンディを乗り越えようとしているのである。

一方、国民国家の下位にある地域の文化の発掘を進め、それを東アジア大の規模で俯瞰することによって、東アジアの文化的特徴を浮き彫りにするという方法も可能ではなかろうか。

例えば、日本には「日本昔話」という民話の体系が存在するが、これは日本各地に地域的に伝えられてきた民話を、日本という規模で編成しなおしたものである。本来口伝の民話は、国家の中においても一地域に発生するものであり、その流布が国家規模に行われる必然性はない。しかし我々は、書籍やテレビなどのメディアを通じてそれを消化し、今では日本人の多くが、瀬戸内海の桃太郎の話も、足柄山の金太郎の話も、すべて「我々日本人の昔話」という形で共有している。

実はこのような試みは、東アジア大で行われても構わないはずである。例えば、東アジア各国の様々な地域に伝わる民話を収集し、類似した話や相反する話など、様々な形で編集して、「東アジア昔話」というような物にまとめ、さらに東アジア各地の言葉に翻訳し、出版や映像化によって広く流布させることができれば、東アジアに共有される「われわれの文化」が一つできることとなる。この作業には、東アジアという大地域と、国民国家よりも下位の地域というレベルが関わり、国民国家自体は介在する必要がない。同様のこと

²² 『朝日新聞』、2005年12月9日。

は祭り・伝統工芸など、様々な民俗学的分野でも行うことが可能であろう。あるいはユネスコの世界遺産制度を模した、「東アジア遺産」制度なども考えられる。これはいわば、既存の文化を掘り起こし、それを効果的に普及させる作業であるとも言える。

「東アジア文化」は、国民国家を上にも下にも超える各種の試みによって、実現することが可能となるはずである。

(2) 東アジア文化の制度的枠組み

さて、前述のような国民国家を超える東アジア文化の誕生は、一方では商業レベルにおいて内発的に進んでいる動きであり、個別の事例に興味深いものが多いものの、それぞれが「東アジア文化」という発想の下に有機的に連繋しているものではない。また、地域文化の掘り起こしとその東アジア規模での編集という作業には、多国間の学術・文化界の協力が必要となる。「東アジア共同体」においては、このような動きを集約し、東アジア文化という概念を育てるための制度的な支援が行われることが望ましい。

ジェイムズ・メイオールによれば、地域主義は、数あるアイデンティフィケーションのなかでも弱々しく、人々の感情を結集する力の乏しい形態の一つであり、ヨーロッパであっても、例えばスペイン人とスウェーデン人は、マドリッドやストックホルムよりも、東京やスマトラにいる時のほうが、互いに同じ文明に所属するメンバーであると認識しやすいように、当該地域から距離を置くことによって、初めて地域がアイデンティティを獲得できるという。ネーションが「想像の共同体」として人間に対する支配力を獲得したのに対し、地域機構は行政主義的な原理を強く帯びており、人々を団結させ、その忠誠心を獲得する力に欠けているという²³。

アンダーソンは『想像の共同体』において、ナショナリズムの源泉として、出版資本主義と、行政的巡礼圏を挙げている²⁴。地域機構は出版資本主義がもたらしたような、域内の出版向け国民語の統一をもたらさないし、行政的巡礼圏を地域大に再編することもない。アンダーソン自身、「一体、だれが、コメコンや EEC のためにすすんで死のうとするだろう」との皮肉を述べているように²⁵、東アジアに限らず、地域主義は国民国家のような愛着・アイデンティティを容易に獲得することがなかった。東アジア文化の構築を構想するにあたっては、この事実を踏まえ、共同体意識を醸成するための制度作りにも十分な注意を払うことが重要であろう。

現状の東アジア地域内における文化協力の制度的枠組みとしては、「ASEAN 社会文化共同体 (ASCC)」の動きは注目に値する。2004 年に発表された ASCC の行動計画は、①思

²³ ジェイムズ・メイオール「ナショナル・アイデンティティと地域主義の復活」L. フォーセット・A. ハレル編、前掲書、183-218 ページ。

²⁴ ベネディクト・アンダーソン著 白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』、NTT 出版、1997 年。

²⁵ ベネディクト・アンダーソン、前掲書、98 ページ。

いやりのある社会の共同体の構築、②経済融合の社会に対する衝撃の管理、③環境面での持続可能性の向上、④地域社会の凝集力の基礎の強化の4つの核心的要素からなっており、このうち④は文化に関係する内容である。同行動計画は第11項で、「ASEANが共同体形成の努力を続ける中で、いかに進歩と繁栄への希望を実現すると同時に、その豊かな文化遺産を保護するかが課題になっている。2020年までの地域の統合によって誕生するとされるASEAN共同体は、人々が歴史的・文化的経験の多様性の中で、共通の地域アイデンティティを意識するものとなる」と指摘している²⁶。具体的な施策については、同行動計画の付属文書Aに記載されており、①芸術家、作家、メディア関係者、学者などの交流強化によるASEANアイデンティティの強化、②特に若者を中心とした人と人との交流の促進、③ASEAN言語学習の促進、④文化遺産の記録と保護の努力の協調、⑤文化イベントの効果・効率向上のための協力、⑥核心的価値観・習慣・伝統の学習促進や相互対話を通じた多様な文明観の融合による相互信頼強化、⑦ASEANイメージの宣伝を列挙している²⁷。

このような制度的枠組みを参考にし、或いは利用して、「東アジア文化」の登録制度を構築し、「東アジア文化」という概念の対外普及に務めるべきである。例えば、ユネスコの世界遺産登録制度や、各国の文化財登録制度などを参考に、東アジア各国の有識者からなる「東アジア文化委員会」を設立し、東アジア地域内において、単一の国家に属さない、共同制作または共有性のある文化作品・文化遺産等を「東アジア文化」として認定し、リストアップするという制度が考えられるのではないか。この際、東アジア文化の性質上、優秀な文化遺産への注目のみならず、日々生まれている現代文化についても十分視野に入れるべきであろう。理想としては、例えば、「東アジア文化」を体現する優秀な作品であると「東アジア文化委員会」が認定した映像・出版などの作品については、外国文化の流入を規制している国家においても輸入条件を緩和する措置を与えることを規定したり、CDや書籍などの関税面で優遇したりする制度を設ければ、東アジア文化の普及に資するかも知れない。

(3) 東アジア文化の特徴と価値観

最後に、東アジア・アイデンティティの基礎となる、共有される価値観の問題について考えてみよう。

先述の外務省作成の東アジア・コミュニティに関する論点ペーパー1も、「人々がこれほど多様で、国と国との間の伝統的結びつきがこれほど弱い地域において、これほどの規模のコミュニティを創ろうとするのは歴史上おそらく初めての試みだろう」、「東アジアにお

²⁶ The ASEAN Socio-Cultural Community Plan of Action
(<http://citrus.c.u-tokyo.ac.jp/projects/ASEAN/ASEAN/AS20041130E%20ASCC%20.htm>)

²⁷ APPENDIX A for ASEAN Socio-Cultural Community Plan of Action(<http://citrus.c.u-tokyo.ac.jp/projects/ASEAN/ASEAN/AS20041130E%20ASCC%20APPENDIX.htm>)

いて我々が共有する共通の価値観と原則は何か。我々はそれらを共有するには多様すぎはしないか」、「アジアの価値観と伝統は共通性のための一定の基礎を提供するかもしれない。しかし、そうした基礎は往々にして同じ民族やその他の繋がりのある者の中で共有されているに過ぎない」と述べている²⁸。それぞれ儒教・仏教・イスラム教・キリスト教の影響を受けた民族を同時に抱える東アジアは、おそらく基本的にキリスト教文明の下にあるヨーロッパのような、統一された価値観によって行動することは困難であろう。

しかし、筆者は東アジア共同体においては、無理に共通の価値観を見つけだす乃至作り出すことを試みるよりも、単純に地理的近接性から導かれる親近感や、善隣友好の必要性の認識が十分に存在すれば、共同体の凝集力はある程度確保できるのではないかと考える。多様な価値観を包含する東アジアにあって、あまりに厳密な価値観を共有しようとするれば、逆に摩擦や対立の火種になるかも知れないからである。

白石隆は日本、韓国のトレンド・ドラマに登場する人たち、ブランドもののファッションに身をよそおい、ファッションナブルな地区のファッションナブルなレストランで食事をするプロフェッショナルが、「アジア人」を表象するようになったとし、「アジア人」アイデンティティの出現を指摘するが²⁹、例えば日本人が韓国・台湾・香港などのドラマや映画を見て、その主人公に本当に「アジア人」のアイデンティティを見いだしているかどうかは疑問なしとしない。東アジア人がハリウッド映画を見る時と、韓国ドラマを見る時には、主人公に対して抱く感情にどの程度の質的な差があるのかは検討が必要であろう。

しかし、流行文化の東アジア大の展開が、確かに東アジア域内の文化的差異を縮小させ、相互の親近感の増幅や、価値観の近似性の拡大をもたらしたことは事実であろう。故に日本人は韓国のドラマを見て共感することが可能になってきたのである。

この親近感は、地理的近接性と、人の外観的類似性に根ざしているという点において、「東アジア・アイデンティティ」ということもできる。星野博美がインタビューした香港人青年・文道は、「いいものを着て、いいものを食べ、いいものを持ちたい。その欲求にぴったり当てはまったのが日本だった。その対象はアメリカやイギリスじゃダメなんだ。あまりにかけ離れてるから。日本人は背格好も似ているし、環境だって似ている。ちょっと手を延ばせば届きそうな感じがする。その感覚が香港人にとっては魅力なんだよね」と答えている³⁰。

佐藤考一は、「ASEAN のロゴ・マークが友好と団結を示す東ねられた稲の茎で表現されていることは象徴的である。逆に言うなら、ASEAN 諸国は互いに稲作国家である以上の共通性が見当たらない場合が多いからである」と述べているが³¹、実は稲作国家としての共通

²⁸ 日本国外務省、前掲論文、2004年。（東海大学平和戦略国際研究所編、前掲書、228 ページに転載）

²⁹ 白石隆、前掲論文、28 ページ。

³⁰ 星野博美『転がる香港に苔は生えない』、情報センター出版局、2000年、437-438 ページ。

³¹ 佐藤考一「「東アジア共同体」構想と日本」『アジア研究』、第52巻第3号（2006年7月）、

性は、民話や儀式・生活様式など、伝統的な文化の中に意外なほど多くの共通性を東アジアにもたらしているかも知れない。しかも稲作国家は ASEAN だけでなく、北東アジアを含む東アジア全体の共通の特徴であり、これに近年の急速な経済発展・工業化・都市化という特徴も加えれば、現代文化の中にも東アジアの特徴は潜んでいるかも知れない。

これらの共通の特徴は、「価値観」と称するには大げさな存在かも知れない。しかし、これによって少なくとも東アジア各個区民の間に親近感を醸成することは可能であろう。東アジアにおいては、まずはいきなり価値観の共有を目指すと言うより、親近感の醸成から始めればよいのではないか。

それに対し、自由・人権・民主などのいわゆる普遍的価値観をもって東アジア共同体の共通する価値観とすべきとの見方もある。

外務省作成の東アジア・コミュニティに関する論点ペーパー 1 は、「民主主義、人権等、普遍的に認識されている原則についてさえ、我々の立場は時々異なる」と述べている。確かに「アジア的価値観」の議論は、往々にして欧米諸国からのアジアに対する批判への反論として提起されており、「普遍的」とされる概念が、東アジアにおいて「普遍的」に共有されているとは言い難い。しかし東アジア各国での民主化の進展を受け、民主主義・人権などは確かに東アジア地域内に徐々に浸透しつつある。例えば、インドネシア・シンガポール・中国・マレーシアなどの諸国は、1993 年から 1997 年頃にかけて、個人より集団を重視する、年長者に配慮するなどの「アジア的人権」を掲げてきた。しかし、アジア金融危機によって、欧米への反論に主眼点をおいたそのような議論は打撃を受けた。現在では、ASEAN においては、国際的な人権規約のうち、ASEAN 各国が批准しているものについて、ASEAN として人権レジームを形成する努力が進められつつあるという³²。

普遍的価値観の共有は、東アジア共同体の凝集力にとって肯定的に働くであろう。しかし、いわゆる普遍的価値観は、あくまで主として西欧に源を發し、世界に普遍的な存在と位置づけられるものであるため、東アジア・アイデンティティにつながる必然性はないことに留意すべきである。普遍的価値観の共有により、東アジアの相互理解の障害を減らす一方で、東アジア地域の独自性を象徴できる存在が、アイデンティティ形成には別途必要となるであろう。伊藤憲一は「東アジアにおいても、地域の歴史に根ざしたアジア的価値と近代世界に共有される普遍的価値の双方に共通の価値観の源泉を求めるべきである。アジア的価値を確認し、探求することは『東アジア共同体』のアイデンティティを明確にし、個性ある豊かな社会、文化の形成に資するであろう。また、普遍的価値を真に実現するこ

9 ページ。

³² 「ASEAN 人権レジーム形成に向けた地域的協力の現状と課題」（早稲田大学 21 世紀 COE プログラム「現代アジア学の創生」共同研究プロジェクト「アジアの社会開発」・「東アジア・コミュニティ研究グループ」2006 年度第 2 回研究会での首藤もと子による口頭発表、2006 年 6 月 21 日）。

とはよりダイナミックで成熟した社会、経済、政治制度を確立することにつながる³³と主張している。筆者も「東アジア文化」の共有がもたらす親近感と、(ある程度の多様性を包含しつつも)共有される普遍的価値観が、東アジア共同体の接着剤として働くであろうと考える。

おわりに

東アジアは、その歴史において地域全体を覆う東アジア文明を持たなかったため、域内に多様性を残していることと、各国がそれぞれ「中華思想」的な強いナショナリズムを持っていることから、東アジア・アイデンティティは弱く、東アジア共同体のような地域主義の動きも遅れがちであった。

最近見られる現代文化の東アジアに広がる流行は、歴史やナショナリズムを乗り越え、東アジアの相互理解の進展を進める可能性を示している。しかし、これらの文化は現状においては基本的に各国文化の枠内にあるため、文化交流と同時に文化摩擦やナショナリズムの反作用も一部に引き起こしている。

このような問題を解消するためには、東アジア各国の文化が融合した「東アジア文化」を、域内の者が共有できるようにならねばならない。国境を越える文化作品の共同制作や、各国国内の小地域の文化を東アジア大で再編成するなどの作業によって、「東アジア文化」を構築することができるであろう。「東アジア共同体」構築の議論においては、「東アジア文化」の育成のための登録制度などの環境作りも考慮されるべきであろう。「東アジア文化」の共有による親近感と、普遍的価値の共有によって、「東アジア・アイデンティティ」を増幅させ、「東アジア共同体」などの地域協力の推進力とすべきであろう。

「東アジア共同体」の構築は、政治・経済等の分野で様々な問題に直面しているが、突き詰めれば東アジア各国、特に日本と中国、日本と韓国などの間での相互信頼の不足という問題に集約される。その意味で、「東アジア文化」を構築し、「東アジア・アイデンティティ」を強めることは、域内各国の世論に影響し、政府の行動にも大きな後押しとなるはずである。

³³ グローバル・フォーラム主催第4回「日・アセアン対話」(2005年6月12日-13日、東京)でのスピーチより (<http://www.ceac.jp/j/column/050627.html>)。